

フレンドシップ事業の幼稚園教育への試行的応用

—— 宿泊保育を通して ——

神 永 直 美 *・大 原 いづみ *・山 路 純 子 *

吉 澤 勲***・戸 塚 茂 則 ***

(1998年4月30日受理)

Applications of Friendship Projects to Kindergarten Education through an Example of an Overnight Stay

Naomi KAMINAGA, Izumi OHARA, Junko YAMAJI

Isao YOSHIZAWA and Shigenori TOZUKA

キーワード：フレンドシップ事業、ボランティア学生、宿泊保育、幼児、体験実習

平成9年度、フレンドシップ事業のパイロットプログラムが提示された。この事業の一部としてボランティア学生が、附属幼稚園の宿泊保育に参加するという初めての試みを行った。

事前打ち合わせ、宿泊保育当日、そして事後の報告書等を通して本事業を幼稚園教育へ応用した成果について報告する。得られた結果は、大略以下のようにまとめられる。

- 1 ボランティア学生にとっては、幼児と生活を共にすることで幼児のさまざまな姿に出会い、幼児の特性や幼稚園教育の基本である「心の動きにそった援助」について考える機会となった。
- 2 幼児にとっては、新しい出会いを通して、いろいろな人に温かく見守られているという安心感をもち新たな信頼関係を築くことができた。
- 3 幼稚園教師にとっては、宿泊保育の運営にあたり時間的にまた気持ちの面でゆとりができたことで、一人一人の幼児との対応がさらに細かくできるようになった。
- 4 本事業を通して、附属幼稚園と大学とのコミュニケーションが非常に密になり、さらに連携を深めていくための契機となった。

* 茨城大学教育学部附属幼稚園

** 茨城大学教育学部理科教育

*** 茨城大学教育学部附属教育実践研究

指導センター

1. はじめに

平成9年度、学部より教育実践研究指導センターを通してフレンドシップ事業について紹介があった。

本事業の基本的目的は以下の3項目で示されている¹⁾。

1. 教育学部生に対し、児童・生徒と直接ふれあい、ともに学ぶ場を経験するチャンスを提供し、将来の教師としての実践的指導力の基礎の育成を図る。
2. 教育実習以外に体験学習の機会を積極的に設定し、実践的指導力育成をめざす教職カリキュラムの充実や、教職専門科目の内容・方法の改善に資する。
3. 地域の学校の教育活動に「学生ボランティア」を派遣したり、「学生の開催する教育文化支援活動（遊び体験講座、公開研究講座、補充学習教室）」に児童・生徒が参加することをとおして、本学教育学部と地元教育諸機関との連携を強化する。

上記の概念図は、図1に示される²⁾。

また、附属教育実践研究指導センター長から「教師としての実践的力量形成に資するため、教育実習以外にも児童生徒との触れ合いの場を設け、附属学校・園や公立小学校の教育活動に学生のスクールボランティアを派遣したい」との説明があった³⁾。

これらの事柄を踏まえ、附属幼稚園でこの事業を活用する場があるかどうかを検討した。ボランティア学生と幼稚園児の双方にとって有益で、お互いの学びの場となることを考慮し、幼稚園教育へ活用することを計画した。

本事業の実施は初年度であり、かつこれの幼稚園教育への活用も初めてであり慎重にならざるを得なかった。そのため、学部側と学生の参加の仕方、保険、実施にあたりかかる経費などについて話し合いを重ね、確認した上で具体的に計画を立てていった。

数年前から本園では「宿泊保育」を実施しており、今回で3回目という実績があることから、これにボランティア学生の参加を得て幼児に与える教育的影響、学生自身の考え方の変化を通して新しい成果を期待できるのではないかとの判断に立って本研究を実施した。期待通りの結果が得られたので報告する。

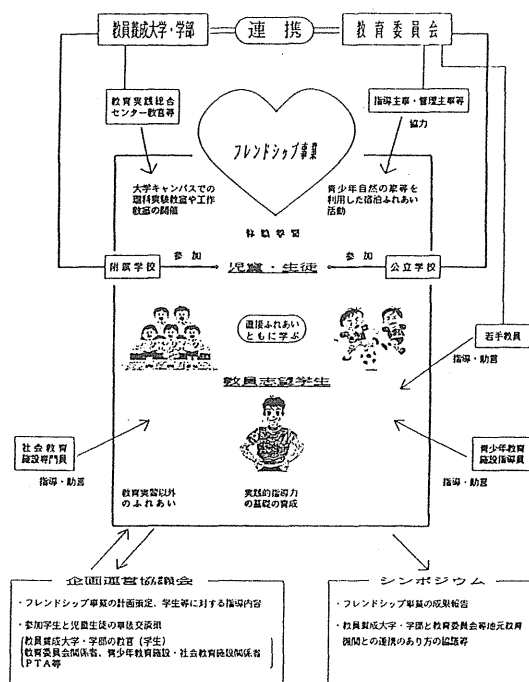


図1 教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費による概念図

2. 宿泊保育実践記録

本園では、毎年秋に年長児が参加する宿泊保育を実施している。

その目的は、自然の中で存分に遊び、自然とのふれ合いを深めることや、友達と一緒に生活するなかで自分の力を発揮すること等である。

場所は茨城県那珂郡山方町にある家和楽（やわら）青少年の家*で、期間は一泊二日である。

上記の家和楽青少年の家までは、本園からバスで約1時間程度であるが、附属幼稚園のある水戸市街の都市部の風景とは全く異なり自然豊かな山間地の風景が広がる。おそらく幼児たちにとって、これらの風景はあたかも未知の世界へ来たように感じられるであろう。



写真1 「こんにちはの会」の様子

この環境を舞台に、幼児たちは一泊二日の間、いつもとは違う生活を展開する。

幼児たちは自分たちで決めたグループ（7～9人）に分かれ行動する。グループ単位で部屋を決め、幼児たちの協力のもとで食事の準備をし、入浴し、就寝するというスケジュールに従って生活する。写真1は、家和楽青少年の家のホールでの「こんにちはの会」の様子である。

宿泊保育は、幼児たちの気持ちの中では、幼稚園の生活の中で最も楽しい行事の一つとなっている。そしてまた、園としても年間計画の中に、親から離れ共同生活体験を通して世界を広げる体験を得るという意味で重要な位置づけになっている。

2-1 事前打ち合わせ

フレンドシップ事業を活用するにあたって、本園で一番大切に考えたことは、ボランティアの学生にとっても幼稚園児にとっても有益であり、学びの場となる「環境づくり」についてである。短い一泊二日ではあるが、そこでお互いに心を開き、温かい信頼関係を築いて心を通い合わせ、人と人の出会いの素晴らしさを味わってほしいと考えたからである。

そこで、お互いに身近に感じられるように、またボランティアの学生が行動しやすいようにと考え、ボランティア学生も幼児たちのグループに一名ずつ入ることにした。幼児には宿泊前からグループの「お姉さん先生」としてボランティア学生の名前を知らせ話題にすることで、グループの仲間として意識がもてるように配慮した。

また、前日の事前打ち合わせの集合時間を保育時間内に設定し、以下のような幼児と一緒に活動する触れ合いの時間を設けた。

* 家和楽青少年の家：茨城県那珂郡山方町161番地

「青少年の家で、部屋の入り口に貼るグループのメンバー紹介のポスターをつくろう」という投げかけで、ボランティア学生も一緒にポスターづくりをした。はじめは何となくお互いにぎこちなかったものの、「ここに先生の顔を描いて」「変な顔になっちゃった」「ちゃんと名前も書いてよ」などと言いながら一緒に活動を通して徐々に気持ちがあぐれ、幼児たちは「いっぱい遊ぼうね」「一緒にお風呂に入ろうね」と明日から一緒に過ごすことを楽しみに降園していった。

幼児の降園後、事前打ち合わせを行った。その日程表を表1に示す。それをもとに全体的な流れとボランティア学生の動きを説明した。さらに、個々の幼児に対しての留意事項についてはグループ分けの表や個票（事前に家庭に調査票を配布し、夜間のトイレについて、食べ物の好き嫌い、就寝・起床時間、健康面、その他の心配事等の情報を得たもの）をもとに説明を加えた。

私たちが、ここでボランティア学生に配慮してほしいことで強調したのは以下のようなことである。

- ・ 幼児と一緒に生活を共にしながら、幼児が何に興味や好奇心をもっているのかについて関心を寄せ、共感する気持ちをもって接してほしいこと。
- ・ 自分がグループの先頭になり行動するのではなく、幼児の行動を後ろから支え援助してほしいこと。
- ・ ボランティア学生も指導者であることを自覚し、教育的な配慮のもとに行動してほしいこと。
- ・ 特に、安全面には細心の注意を

表1 家と楽青少年の家宿泊保育日程

家と楽青少年の家宿泊保育日程		平成9年9月19～20日 茨城大学教育学部附属幼稚園年長組		
時刻	活動	内容	ボランティア学生	備考
9:19 10:00	幼稚園集合	出欠の確認 用便 上履等準備 小リュック準備	9:30 集合 自分のグループの幼児確認 小リュックの準備(スナップフックペン・半吊水筒・シート)確認	体育服・グループ帽で登園
10:30	弘道館前出発	(バスの中) 紙・グム・クイズ 車窓から見る風景 諸注意	バスに乗車する	日立電鉄バス バスガイドさん
11:30 14:30	パークアルカディア着 遊歩道 アスレチック 弁当 パークアルカディア発	人数確認	アスレチックでは分担に分かれ幼児と共に遊ぶ 弁当も幼児と共に食べる 弁当の用意	(雨天時) 淡水魚館 アトナリウレ 13:30 弁当は青少年の家に到着後にすべて回収
14:45	家と楽青少年の到着 こどもにちの会(入所式) 各部屋へ 休息	所長さん挨拶 園児代表挨拶(当番)	グループの部屋を確認 幼児と共に移動 荷物の整理の補助 弁当回収	入所式進行・押水
15:30	夕食準備(カレーライス)	カレーライス作り 小リュックを持って 移動 クラフト(バッジ作り) スナック	材料を運ぶ 幼児と共にカレーライス作り 周辺で持ちながら遊ぶ クラフト(バッジ作り)補助	兼用石けん 小さいナイフ・ビナー ご飯は厨房で用意
17:00	配膳 夕食	天気が良ければ外で テーブル拭き 配膳 後片付け	ご飯を運ぶ 配膳補助 幼児と共に食べる	自分たちで作ったという気持ちを大切に
18:00	お楽しみ 夜の故事 花火	夜の故事では、暗いところを歩いたり、虫の音を聞いたりして楽しむ 花火は駐車場か運動場	グループについて危険のないように配慮 バケツの準備	防虫スプレー バケツ・花火
19:00	入浴・就寝準備 大 小 入浴 1～19:20 夜・お風呂 2～19:20 夜・お風呂 3～19:40 おきこりする (大小両方使う)	大浴場は2グループずつ 小浴場は1グループ バジャマを着る 両替さ・ふとん敷き	入浴補助	トイレに起こす幼児は扉の方に
20:00	絵本・紙芝居	就寝準備	絵本や紙芝居を読む	静かな雰囲気作り
21:00	就寝		一緒に横になり、就寝の雰囲気を作る(幼児と共に就寝)	トイレ
23:00	多田・大木	起こす幼児	22:00 ミーティング	
9:20 1:00	近藤・小島			
3:00	大原・押水			
5:00	押水・平			
6:00	多田・石川			星・花教師出発
6:30	起床	洗臉・着替え ふとんをあける	幼児起床前に全員の夜尿調べ	朝服・トレーナー ふとんはできるだけ決まったたたみ方で
7:00	朝のつどい・体操	園長先生「おはよう」歌 ピーターパンたいそう	移動	駐車場広場で 進行一大原・平 音楽テープ・パンクン
7:30	朝食(卵焼き定食)	グループごとに着席 テーブル拭き 配膳 後片付け	配膳補助	できるだけ自分で いすを上げる
8:30	周辺散策	クラフト(バッジ作り) スナック	クラフト(バッジ作り)補助	スナックパック
9:30	帰宅準備・清掃	持ち物の整理 部屋の清掃	荷物の確認 部屋の清掃	各所の点検 最終点検・押水
10:00	お別れの会(退所式)	園児代表挨拶(当番) 園長先生挨拶 所長さんの挨拶 ボランティア先生にありがとう		進行一大原
10:30	出発		全員同乗	日立電鉄バス
11:30	弘道館前到着、解散			

払ってほしいこと。

- ・ グループには、ボランティア学生の他に担当の教師が1名ずつつくので、何かわからないことがあったら相談して行動すること。ただし、年長組以外の教師は、保育があるので1日目の午後3時以降に到着し2日目は早朝6時半には出発するので、その場合は年長組担任に相談すること。

ボランティア学生8名の構成は、まだ教育実習の経験がない2年生3人、3年生4人、大学院生1人である。この学生全てにこちらの教育的な意図がどこまで伝わったかどうか疑問ではあったが、一生懸命に説明を聞き取ろうとする眼差しからボランティア精神にあふれ情熱をもって参加しようとしている姿勢がうかがえ、頼もしく大いに期待できるのではないかと確信した。

2-2 宿泊保育当日の記録

・登園時

保護者とあいさつをしながら、ボランティア学生について紹介する。保護者は、前日の様子を幼児から聞いているのか、とても好意的に受け入れているようであった。

教師が参加を渋っている幼児への対応をしている間に、ボランティア学生は幼児が出かける準備の援助をする。

ボランティア学生と手をつないだまま離れようとしないうちが気になるが、不安の一つの表れと解釈し様子を見ることにする。

・山間の公園（パークアルカディア）

1時間ほどバスに乗ると、アスレチックや長い滑り台等の施設がある公園、パークアルカディア（山方町）に着く。

ここでは、幼児はそれぞれ自分の好きな遊びに取り組む。写真2がその様子である。ボランティア学生もそれぞれ分かれて安全を配慮したポイントについてもらう。幼児の挑みたいという気持ちをどこまで認め、安全面に配慮するのかというところで迷いや悩みにぶつかっている様子であったが、他の教師の声かけの様子や他のボランティア学生の動きを見たりしながら自分の行動を修正していく様子がうかがえた。



写真2 パークアルカディアでの活動の様子

・カレーライス作り

再びバスに乗り、家和楽青少年の家に着く。

「こんにちはの会」を終えると、部屋で一休みし、夕食の準備にかかる。幼児は、以前にジャガイモ掘りをしたあとにカレーライスを作り年少・年中児にごちそうした経験がある。

その経験を生かしながら、幼児たちは作り方を描いた絵を見ながら、積極的に準備をしたり野菜を切ったりしている。ボランティア学生はその様子に圧倒されている感じであったが、幼児たちと共に楽しみながら参加している様子だった。

カレーライスができあがると、川の流れを見ながらの食事である。ボランティア学生の中には「こんなにおいしいのができるなんて思いませんでした」と舌鼓を打っている姿も見られた。「おかわり」「おかわり」の連続であつという間に鍋一杯のカレーがなくなってしまった。

カレーライスを作っている様子を写真3に示す。

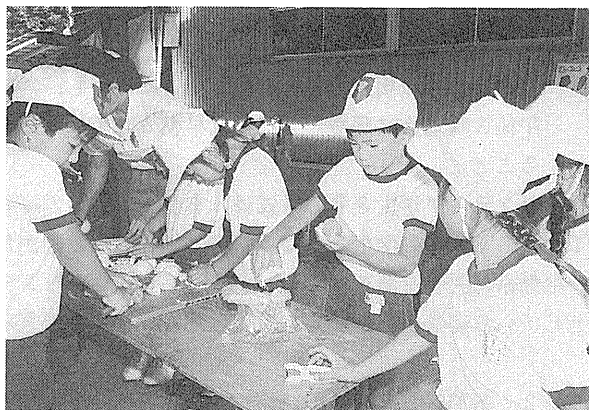


写真3 カレーライス作り

・トトロ探検

宿泊保育で幼児たちが楽しみにしていることの一つに「トトロ」との出会いがある。「宿泊保育に行けばトトロに会える」という話が年長児の間に代々引き継がれている。

教師も、日常の保育ではなかなか味わえないこのわくわくしたファンタジーの世界を十分に味わわせたいと考えている。そこで、夕食後はトトロの森の探検に行くことにする。トトロは人間の声がすると逃げてしまうかもしれないこと、そつとついてくることがあるのでよく周りの音や様子に気を付けながら歩くこと、などを約束し出発する。

ボランティア学生も、幼児たちの真剣な眼差しや抜き足差し足で歩く姿を見て、幼児と共にファンタジーの世界に引き込まれていくようであった。幼児たちの音をたてない会話（風の音や、川の流れの音をとらえ、「トトロが来たのではないかと教え合う）にも相づちを打ったり、一緒になって身振り手振りで会話を楽しんでいる様子が見られた。「私もトトロが、本当にいるんじゃないかという気になってきました」という感想を漏らす学生や、報告書の中に「トトロのことにしても、先生の細かいところまでの気配りはすごいです。子どもたちは絶対にいると信じているし、私も夢があつていいなと思いました」と感想を書いていた学生もいた。

写真4は、一緒に散歩に出かけた時の様子である。

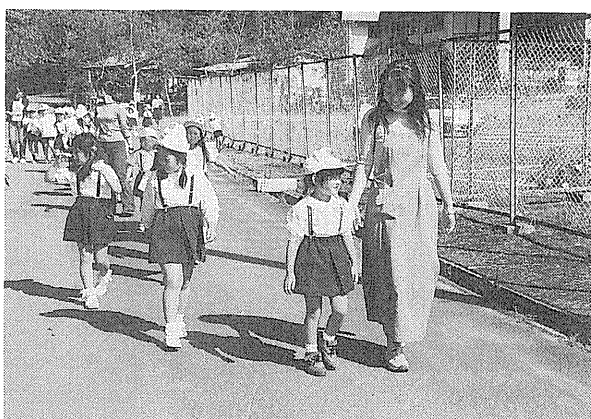


写真4 散歩の様子

・入浴～就寝準備～就寝

お楽しみの探検が終わる頃には、すっかり日が暮れてきた。グループ毎に部屋に入り、入浴の準備にかかる。

持ち物等を一人一人が準備したり、片づけたりすることをどこまで援助すればよいかについては、日頃の幼児の生活を知らないボランティア学生にとっては「もっと手伝った方がいいのか」「手伝いすぎではないか」ととても心配だったらしいが、事前打ち合わせの時に「幼児の主体的な行動を支える」という基本的



写真5 就寝の様子

な姿勢を提示しておいたこともあり、幼児のやる気を大切にしようという気持ちをもってかかわっていたように思う。

グループに（各部屋に）確実に1人以上の大人がいたことで、昨年までとは違い安心感があり、時間的にもスムーズだった。

ボランティア学生は、夜の反省会を終えると、グループの幼児たちと共に就寝した。

写真5は、就寝の様子である。

3 ボランティア学生の心の変遷

ボランティア学生8名中6名から宿泊保育を終えての報告書が提出された。

以下に、その記録をもとに学生たちの宿泊保育に対する心の変遷に付いての考察をする。

ここで、A、B、Cさんは2年生、D、E、Fさんは3年生である。

3-1 参加への戸惑い

- ・ 正直言うと、はじめに抱いていたものは不安感でした。というのも、私自身5～6歳の年頃の子どもに対して、とても苦手意識があったからです。（Aさん）
- ・ 今現在、2年生の私はまだ教育実習やその他の教育現場を実際に体験したことがなかったので、最初は不安で緊張していました。（Cさん）
- ・ 初めての宿泊保育ということで次にどうしたらよいか迷うこともありましたが、時間がたつうちに自分の役割もはっきりとしてきましたし、迷ったときには同じグループの〇〇先生が力になって下さいましたので気持ちよく活動をすることができました。（Dさん）
- ・ 事前の打ち合わせで、3時頃までは一緒の先生がいらっしやらないということをうかがって大丈夫かなという不安がありました。（Eさん）
- ・ 私は、附属小学校の教育実習が9/17までであり、19～20の宿泊保育に参加するかどうかかな

り迷っていました。体力的にも精神的にも疲れていて、仕事ができるかどうかとても不安でした。(Fさん)

と、大半の学生が何らかの戸惑いを感じていた。

AさんやCさんは、幼児とのかかわりの経験がないことへの戸惑い、EさんやDさんは自分一人でグループを見なければならぬと感じたことや見通しがもてないことへの戸惑い、Fさんは自身の体力や精神力への戸惑いをあげていた。

3-2 幼児との触れ合いを通して

前述のように、戸惑いをあげていたボランティア学生も実際に幼児と接していくうちに、気持ちに変化していく。

- ・ けれども、前日の対面の時にその不安は期待や自身へとつながっていきました。また、2日間行動を共にして、初めは、園児だけとして見ていた私自身の彼らへの視線が、次第に1人の対等な立場である人間としてとらえてみるようになっていきました。(Aさん)
- ・ 子どもたちは、ありとあらゆるものに興味をもちます。歩いていても、ちょっとした草や花意志にまでも興味を持ち、すぐ触ってみたりします。そして、黙っていることはなく、おしゃべりや歌うことが大好きなのです。(Cさん)
- ・ しかし、当日になってみると、集合する場所など、集まるということを伝えると、子どもたちが自主的に「〇〇ちゃんはどこだよ」などと呼び合いながら、順番にならぶなどということがありました。必ず私が中心となって何もかもしなくてはならないのではなく、子どもたちに気付かせていくというかわりや、そのグループの子どもたち同士で活動できる姿を見取ることができたと思います。(Eさん)
- ・ カレー作りは、子どもが主体的に活動していた気がします。危なっかしくてハラハラしながら包丁さばきを見ていたけれど、安全にできるように気を配っておけば、5歳児にもここまでできるんだと感心しました。盛りつけしてあるのを運ぶだけなのに体操服がカレーまみれになっている子もいて、大人が当たり前にも子どもには大変なんだと思いました。

(Fさん)

これらは、正に幼児理解の過程であると思われる。Aさんが「初めは園児だけとして見ていた」のが「次第に対等な立場である人間として捉えてみるようになった」と言うように、幼児の生活を外側から見るのではなく、幼児と生活を共にしながら「何に興味をもっているのだろう」「どういう気持ちなのだろう」「何をしようとしているのだろう」などと幼児の興味や心の動きを感じ取ろうとしたからこそ、幼児を「対等な立場である人間として」捉えるようになったのであろう。

そして、そのような眼差しで幼児の姿を捉えるようになると、「必ず私が中心となって何もかもしなくてはならないのではなく気づかせていく」(Eさん)ようなかわりに気付いたり、「安全にできるように気を配っておけば、5歳児にもここまでできる」(Fさん)と幼児を何もできない存在として見るのではなく、発達のひとつの段階にいる幼児として捉えるようになる。

「ここ数年、幼稚園児の日常ということについて、ほとんど接することができなかった私にとって宿泊保育は5歳という子どもたちについて少しでも知ることのできる絶好の機会となりました」

(Eさん) と言うように、ボランティア学生にとって幼児の特性を知る上で価値のある体験となったのではないかと考える。

3-3 「心の動きにそった援助」について

教育者としてのかかわりについて、考察したり反省したりしている部分は以下のような箇所である。

- ・ もう少し行動に余裕を持ち、広い目で周囲を見渡せられればよかったと思います。(Aさん)
- ・ 「思うように動けなかった」という思いも残りました。実際、宿泊保育中、「何かしたいけど、どうしていいかわからない」と思うことが何度もありました。(中略)お弁当の時にグループ内に後片付けをしていない子がいたとき、ある先生はそのままにして本人に片付けさせるようにと言いました。広場の真ん中だったので片付けてから注意した方ががいいだろうと思ったので、最初、驚きました。小さな事かもしれないけれど、こうした事が前日のミーティングで、先生が言っていた「教育的配慮」なのだろうと思いました。(Bさん)
- ・ カレーを作る際、すべての子どもたちに同じ程度に仕事をする機会を与えられず「私はあまりできなかった」という気持ちを持ってしまった子どもがでてしまいました。このような場合などは、こちらから順番などを決めるようにもっていったり、切った野菜(数等分)をそれぞれに渡して、それを責任もって切ったりできるように援助することをしていくべきだったと思います。(Eさん)
- ・ 部屋にいるときには〇〇先生(同じグループの教師)の存在がとても大きかったです。子どもに対するかかわり方にしても、感心することばかりです。判断も速いし、指示もはっきりとしていて分かりやすかったし、今やるべき事ははっきりしていたので子どもたちもスムーズに行動することができたのだと思います。何と言っても、ことばの表現力の豊かさにただ驚くばかりでした。(Fさん)

自分自身のかかわりを反省的に振り返ったり、分からないところを自覚したりする思考過程が読み取れる。その姿は2年生よりも、やはり実習を経験した3年生の方が多く見られた。

「附属小の実習後ということもあり、そこで課題となったどこまで自分が子どもにかかわっていくのか、また、見守っていくのかという課題をもちながら参加したのですが、援助すべき時に適切な援助ができなかった」(Eさん)と、自分の実習の中で感じた課題を実際の子どもの姿や自分のかかわりと照らし合わせながら考察する学生もいた。

また、教師の行動のなかに「教育的配慮」があるのではないかと考え、自分のかかわりを振り返る思考過程も読みとれる。この行為は、自分のかかわりを振り返り、その意味を考察していくという保育の省察につながる大切なことである。

それは、「先生方や他のボランティアの人たちの様子を見て感心することが何度もありました」というBさんのように他の同じ立場の人と自分とを照らし合わせて考える行為も同じである。

ただ単にスケジュールを円滑に進めるためだけではなく、幼児と触れ合う中で教育的なかわりの意味を考える機会に出会うことに、教育者としてボランティア参加する大きな意味があるように考える。

1日目の深夜のミーティングで、「幼児が興味をもったものを一緒に目の高さになってに見ることの楽しさに気付いた。」と発言していた学生がいたことや、報告書に「以前サークルの合宿で同じ所に行ったことがあったのですが、その時には気付かなかった川やドングリ、コオロギやカエルのようなものにたくさん出合わせてもらいました。」(Dさん)と感想を述べていることから、幼児の心に近づき、幼児の心にそった援助を考えていく手掛かりに気付いたと思われる。

「大学の授業だけでは学べないことを経験することができた貴重な二日間でした。」(Cさん)や「参加できて本当によかったと思っています。」(Fさん)「宿泊保育はいろいろなことに気付いたり、考えたりするよい機会だったと思います。」(Bさん)「結果として、多少の疲れはあったものの、ものすごい満足感を得られたことは、とても幸せなことだと思っています。」(Dさん)「私としては、年齢によるちがいがなどについて実際に経験することができる大変よい機会となり、このような貴重な経験のできる機会をいただきお礼申し上げます。」(Eさん)など、この事業に参加してよかった、幼児たちと接して楽しかったと感じたという体験こそが、教職をめざす学生にとって貴重なことなのである。

4 幼児のボランティア学生への思い

宿泊保育が終わって、「お世話になった人たちに手紙をかこう」という提案に対する手紙を通して、幼児がボランティア学生に抱いた思いについて考察してみる。

以下にその手紙の一部を示す。

「せんせい いろいろとありがとうございました。かさとかおしえてくれてありがとうございました。また、らいねんもいっしょにあそぼう。」

「いろいろおせわになりました。ぜんぶたのしかったです。かれーもおいしかったです。」

「また、あえたらいいね。おふとんとかしめてくれてありがとう。」

「えほんを2こよんでくれてどうもありがとう。」

「せんせいといると、おもしろくてたのしくてずっといたいなあとおもいました。わかれるとおもうとかなしくて、わかれることがかなしいことだとわかりました。」

これを見ると、様々な場面でのボランティア学生との触れ合いが印象に残っているのがわかる。

かど あき
おねえせんせい へ
どうもありがとうございました。^
えほんを2こよんで
くれことうもありがとう



資料1 幼児の手紙

散歩の時、道ばたの草で傘の作り方を教えてもらったことや、カレーを作るとき一緒に肉を炒めたこと、就寝準備の様子、就寝前のひととき、そして別れの時など。

一人一人それぞれが触れ合いの場面をもち、ボランティア学生と心を通い合わせていたことがわかる。

幼児たちは、さらにボランティア学生に返事をもらったことを喜び、また返事を書いたり、「運動会に来てほしい」と招待したりとその後交流が続いた。

幼児が日常的に一緒に生活している人とはまた違う人と出会い、その人に温かく見守られているという安定感をもち、その安定感から生まれる人に対する信頼感を得たと言える。このような体験が人とかかわる力、信頼関係をしっかりと築いていく力につながっていくものと考えられ、将来の人格形成に寄与すると確信する。

5. 幼稚園にとっての成果

幼稚園教師にとっての成果は、ボランティアの学生が1グループに1名ずつついたことで、ある程度任せられる部分ができただけで、不安になっている幼児や気になる幼児に心を寄せる時間的な余裕ができたということが大きい。このことによって、一つのグループだけでなく全員に気を配ることができ、一人一人に対して、そして場面の一瞬一瞬に対してゆったりとかかわることができたと思う。昨年度までは、スケジュール通りに動くということばかりに気を取られていたが、今回は余裕を持って先を見通しながら幼児と対応することができたように感じる。

さらに、本事業を通して附属幼稚園と大学との連携の場や機会が非常に増えたことがとても大きな成果である。今までは大学の先生方との接点は、会議の時に一緒に席で顔を合わせ会話を交わすことが精一杯のところであった。しかし、この事業に取り組み始めてからは、どのようにすれば成果を得られるかどうかという同じ目的に向かって、活発かつ活気のあるやりとりが行われるようになった。

これから、大学とのコミュニケーションを深めていくための重要なよい契機となったことは非常にうれしい成果であった。これから、教育実習のよりよい方法について考えていく上でも有益であったと思われる。

6. ま と め

フレンドシップ事業の一部として、ボランティア学生が幼稚園の宿泊保育に参加するという初めての試みを行った。

ボランティアに参加した学生と幼稚園児の双方にとって有益で、お互いの学びの場となることを考慮して、計画を立て実施した。

その結果、得られた成果をまとめると、主に以下の4項目に集約される。

- 1 ボランティア学生にとっては、幼児と生活を共にすることで幼児のさまざまな姿に出会い、幼

児の特性や幼稚園教育の基本である「心の動きにそった援助」について考える機会となった。

- 2 幼児にとっては、新しい出会いを通して、いろいろな人に温かく見守られているという安心感をもち新たな信頼関係を築くことができた。
- 3 幼稚園教師にとっては、宿泊保育の運営にあたり時間的にまた気持ちの面でゆとりができたことで、一人一人の幼児との対応がさらに細かくできるようになった。
- 4 本事業を通して、附属幼稚園と大学とのコミュニケーションが非常に密になり、さらに連携を深めていくための契機となった。

これらの成果をもとに、今後はさらに効果的なフレンドシップ事業の環境づくりを考えていきたい。

また、この事業を参考にしながら、附属幼稚園・大学のそれぞれの教育的機能、そして学生の活力を生かし、附属幼稚園だからこそできる地域に開かれた幼稚園づくりに取り組んでいきたいと考える。

注

- 1) 茨城大学教育学部附属教育実践研究指導センター 『平成9年度 茨城大学教育学部 フレンドシップ事業 ー実践的指導力の基礎の育成ー実践資料集』 (茨城大学教育学部, 1998年) p 1
- 2) 同 上 p 173
- 3) 同 上 ごあいさつ